

二次元ぷち文庫

紅の破壊天使

スカルド

外伝

肉悦の極秘治療



試し読み版

新居佑

表紙イラスト：なかがわひのと

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『紅の破壊天使スカーレット外伝 肉悦の極秘治療』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『紅の破壊天使スカーレット』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



紅の破壊天使

スカーレット 外伝
肉悦の極秘治療

新居佑

表紙 / なかざわひのと

登場人物紹介

Characters

スカーレット

悪の秘密結社“ヴァルケット”の元幹部。いまは、敵対していたセルヴィスと協力し、抵抗軍の一員となっている。

セルヴィス

“ヴァルケット”に対抗する抵抗軍メンバー。正義の使者として活躍中。

みた 三田

抵抗軍の秘密研究所に勤務する女医。

かつて東京として世界にその名を馳せた市街地——今では破壊された高層ビル群の集団墓場となっている。

周囲には人の姿はまるで見えない。当然だ。ヴァルクエツト、突如現れ破壊と暴力の限りを尽くしている謎の秘密組織によって、生活圈を追われた人々はこぞって都心から離れた郊外へと避難している。ここに残っているのは、人々が築き上げた文明の無残な成れの果てだ。

「フン、こんなところに隠れていたとはな。灯台下暗し……いやらしい奴らだ」

どこか愁いを帯びたようなハスキーボイス。腰まで垂れる柔らかい黒い髪。溜め息が出るほどに豊満でしなやかな肢体。全てを貫くような強い意志を浮かべた切れ長の黒瞳。まるで救世の女神のような美しさと強さを兼ね備えた美体が、幸いにも倒壊を免れた古びた一棟のビルの前に佇んでいた。

甘くグラマラスな肢体を包む艶やかで扇情的なスーツを染め抜く鮮やかなまでの真紅。見るものを魅了する美しい紅の天使は独り、壊れかけたビルの中、その隠された地下へと、ブリッとしたお尻を左右に揺らしながら、悩ましい足取りで歩を進めていった。

「これは……!? 随分と立派なものだな」

三フロア程度も下っただろうか。かび臭い薄汚れた階段からは想像もできないほどに明

るく、整えられた部屋を見て、スカーレットは、高く形の良い鼻を軽く鳴らした。

ちようど教室ほどの広さの部屋は、煌々と照明が照らされ、壁もきれいに磨かれている。埃や塵などまるで感じられない空間は、廃墟ビルの地下だとはとても思えないものだ。

人は見当たらないが、並べられたベッドに、いくつもの見なれない器具。それらが物語るのは、清潔感溢れるこの空間が、外界から秘匿された一種の病室か診察室であるという事実だった。

「——っ！ 誰だっ!？」

キインツツ！ とスカーレットは突然背後に生じた気配に向けて、抜き放った長大なランスの刃を突きつけた。

「あらあら。危ないわねえ。紅の破壊天使さんは患者の礼儀というものも知らないのかしら？」

閃刃を鼻先まで突きつけた相手は、そんな状況にもまるで取り乱した様子も見せず、どこかこちらを見下したような、やけに艶のあるゆったりとした甘い口調で話しかけてきた。

身長はスカーレットと同じか、少し高いくらいだろうか。流れるようなウェーブの髪を肩口まで伸ばし、垂れ目気味の目元には凝った意匠のフレームをした眼鏡をかけている。やや厚い唇に微笑を絶やさず、ボンッと張り出した豊かな胸元を大きくはだけ、ピッチリ

としたタイトスカートに、黒のストッキング。そして真白い白衣を絵になるくらい自然に着こなしている。

「はじめまして。ヴァルクエット元幹部、スカーレット。わたしがあなたを担当する三田です。よろしくね」

ツ、と眼鏡のフレームを中指で押し上げながら、三田と名乗った女が微笑む。

「お前が……。そうか、悪かったな」

「話はセルヴィスから伺ってるわ。ふ、ん……」

「な、なんだ……?」

じつとりと舐め回すようにこちらを見る女史に、思わず声が高くなる。

「いいえ、別に。破壊天使なんていうからもっと怖い感じかと思っただけ……意外とかわいい顔してるのね、あなたって」

「バ……ふ、ふざけてないで、とっとと始めろっ！ わたしだって本当はお前たち抵抗軍なんかを手助けしてもらおう気はさらさら……あ、あいつが……セルヴィスがどうしてもい
うから仕方なく……だな……っ」

つい数週間前——スカーレット、そして抵抗軍のメンバーである正義の使者セルヴィスはヴァルクエットの罠によって捕らえられ、女を狂わす魔媚薬によって薬漬けにされた。

その後遺症は、悪魔の秘密結社の手から逃れた今なお、うら若き二人の女戦士たちの肉

体を悩ませ、昼夜を問わず、まるで発情しつぱなしの牝犬のようにふしだらな快楽を求めてしまう。

今日、抵抗軍の秘密研究所に来たのも、侵された身体の治療方法が見つかったとセルヴイスから連絡が入ったためだ。

「ふふ、そう真つ赤な顔をしないで。わかったわ。それじゃ、スーツはそのままでもいいから、そのこのベッドに横になって」

「だれが顔を赤くなんて……っ。くう、わかった。そのベッドだな」

高鳴る鼓動を抑えながら、促されるままに近くの診療用ベッドに横になった。見上げた先には、照明が仰々しく照らされており、まるでこれから解剖でもされるかのような気分になる。

シユル……ッ。

「っ!? な、なんだこれは!? くっ、うううつつっ!」

突如としてベッドの端から伸ばされたいくつものマニピュレーターが、驚く元女幹部の両手両脚を一瞬にして締め上げた。それらはまるで×の字を描くようにギョオンッ! と四肢を上下斜めに引つ張り、きつく拘束する。

「お前っ! いったいなんのつもりだっ!? これが治療だとも……っ」

「ええ、そうよ。ごめんなさいね。わたし自身あなたに恨みなんてこれっぽっちもないけ

れど……仕方ないのよ」

そう妖しく微笑んだ女は、素早い手つきで近くにあるコンソールパネルを細い指でタタツと操作した。

ビシユルツツッ！ ビチイイイツツッ！

先ほどの機械的なマニユピレータとは別の、細い糸のような無数の繊維が天井から伸び、さながらベッドに磔にされた惨めな墮天使の妖艶な肉体に巻きついていく。

むつちりと肉のついた美味しそうな太腿はもちろんのこと、無駄な脂肪など一切ない筋肉質で、それでいて柔らかい二の腕や、キュッと引き締まった腰からハの字型に広がっていく悩ましげな牝のヒップライン。

重力に逆らうようにツンと勃起した乳首や、柔らかで豊かな胸の牝脂肪までが、まるできつく締めつけられた肉のようにギチギチに押さえつけられてしまった。

「くうっ、ふざけ……っ。こんなものでわたしをどうにかできると……ひあっつ！ く、ふうううっ」

スカレットが力を込めて、拘束を逃れようとした瞬間、彼女の口から信じられないくらい甘く艶やかな声が漏れ出した。

「想像以上に敏感なのね、盛りのついた牝犬みたい。ふふ、どれどれ……」

押しよける間もなく、眼鏡の女医の冷たい掌が拘束された身体の上を這いずり回ってき

「つつつつ！ んあああああつつつつ！」

ヌチユウウツツ！ トロトロ……。ビクンツツ！

わずかに吐き出された幸運な精液が、ドロリと肉棒を伝って、女戦士のお腹の上に垂れ落ちる。

「はあはあ……。くう……。ひぎいいいつつつつ！」

悔しがる暇も、生殺しに絶望する暇もなかった。女は今度は、パイズリとフェラチオの同時責めを敢行してきた。あまりに凄絶すぎる快楽に、わずかの時間すらおかずに、擬似肉棒が膨れ上がる。

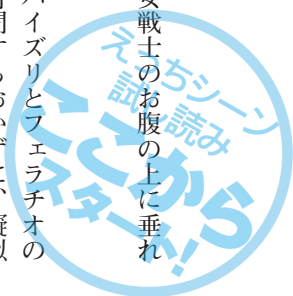
（こ、こんな屈辱……。ゆ、許さな……。おおつ、感じるっ！ ペニス感じまくってしまうううううつつつつ！）

不完全燃焼の淫炎は徐々にだが、確実に真紅の女幹部の精神を蝕んでいった。決して最大限の快楽を味わうことはできない。一回あの絶頂の味を知ってしまったからこそ余計に待ちわびてしまう。そしてその淫らな想いが、更にきつい鎖となつて、囚われの淫囚の心を締めつけて離さない。

「イ……。ク……。つ。んあああつつつつ！ イクうううつつつつ！」

「だめよ。絶対にイカせない。あなたが自ら負けを認めるまではね」

女の手が和らいだのを感じた、もういったい何回目、何十回目になるだろう。



「はあはあ……はあつつ！ はああつつ！ おおおつつつ」

激しく呼吸をすること。そして悔しさと憤りを獣のような声であらわすこと。それだけしかもう考えられなくなっていた。

無様に自由を奪われ、こんな、普段なら一瞬にしてひれ伏せさせることのできる一人の女に、精神が狂ってしまふまで嬲られ続ける。

堪らない。許せない悔しさはあつた。けれど――。

（あ、イ、イキたい……いい。イカセ……も、もう……もうおおつつつ！）

先日まで、人類からも、そしてヴァルクエツトからも紅の破壊天使として恐れられた女の瞳は、ただ目の前で勢いづく人工の肉棒だけを力なく見つめていた。

唇の端からは、力なく涎が垂れ流れ、頬は真っ赤に上気し、物欲しげな瞳には涙さえ浮かんでゐる。

「ねえ、まだ言ってくれないのかしら？ 壊れてもらつても困るんだけど」
ギユプツツ！

ただ機械のようにに任務を遂行していた白衣の女の指先が、今までまったく触れられなかった部分。女の秘め園へとなんの躊躇もなく侵入した。

「ふおっ!? らめ……そこ弄られるとペニス……イギ……いいいっ！」

すでにグチョ濡れになっている蜜壺は、なんの抵抗もせず女の人指し指と中指の二本

を受け入れた。

同時に、股間から生え出た衰え知らずの勃起ペニスが、ドクンツツ！ と大きく鼓動し、頂点へと頭をもたげる。

「ねえ、スカーレット。もう言ってしまういなさいよ。ほら、あなたのチンポも、それにマ○コだつて、こんなにビクビクいってイキたがつてるじゃないの」

そう言うのと三田は、おもむろに穿いていたスカートをずり上げ始めた。露になった、こちら濡れ濡れの秘部を、女幹部の勃起ペニスに近づける。

「ほらあ、挿れたいでしょう？ 気持ちよくなりたいわよねえ？」
シユリシユリ……。

「くうううつ、はあはあ……つ」

先端をいじらしく擦る柔らかい女肉の感覚が堪らなくもどかしい。チリチリと燃えるような肉棒の熱さが身体全体にまで広がっている気がする。

「ふおううつつ！」
ドピユウウツツ！

もう何度目かも分からない不発絶頂。人工的に造られた逸物であつても、狂おしいほどの牡として本能は確かに存在していた。

（あ、穴……挿れたい……つ！ 出したい！ もう、もうどうなつても……イイツツ！）

鼻先にまで突きつけられた白衣の女の秘唇。その芳しいまでの誘惑に、理性と誇りが屈した。

「エ、NS3158……」

かすれるような……懇願するような声で発した。

「ふふ、そう。よく言ったわ」

女が微笑むのが見えた。しかし、そんなことなど、もうどうでもいいことだった。

「チ、チンポおおつつつつ！ スカレットのお、牝犬のチンポ、挿れさせてっ！ シコシコさせてくださいいいいいつつつ！ もう堪らないの！ 蕩けちゃいそうなのよおおおおつつつつつ！」

鎖は自ら解いた。プライドという、女幹部としての生き様という鎖を、自分の淫らな情欲によって、粉々に打ち砕いた。

もう、我慢することはない。

「は、早くうつつ！ 我慢したんですつつ！ ずっとずっとおおおつつつ！ 早く早くつつ！ もう許してくださいいいいいつつつ！」

腰を思いきりクイクイとはね上げる。届きそうで届かない牝穴に向かって、あさましく腰を振る自分はどんなに情けない女だろう。そう思うと、自分を嘲ると、更に感度が増した。「いいわよ。うふ、わたしだつて、そんな大きなチンポを目の前にされてお預けつていう

わけにはいかないからね。さあ、後は二人で楽しみましょう。スカーレット。かわいいがつてあげるわ」

ズボオオオオツツツツ！

「はううううううつつつつ！ おおおおつつ、オマ○コつつ！ わ、わらひ、女に犯されてるつつ！ 女なのに、チンポぶつさしてるうううつつ！」

男の筆下ろしとはこういう感覚なのだろうか。

全身の体毛がわななき、指の先まで快楽電流が流れっぱなしになっている。股間に生えた極太の肉棒が灼熱の太陽のような熱さをもつて、全神経、すべての情欲が集中する。

「ら、らめえええつつ！ もうイクツツ！ 射精しますううつつ！ チンポ幹部はあつつ！ ふしだらで我慢が足りないスカーレットはあつつ！ あはああつ！ ザーメンぶちまけるのが、たまらない変態女なんですうううつつ！」

女の美肉は堪らない味だった。キュウウツツときつく締め上げてくる蜜壺に、焦らされまくった肉ペニスが、たまらずピストンの勢いを増す。

どれだけ焦らされ、どれだけ苦悶してきただろう。やっと訪れる歓喜の瞬間に、スカーレットは涙を流して、腰を振りたくった。

「あはは、イイわよスカーレット。出しなさいっ！ 太くて固いあなたのチンポから、くっさいセイエキ溢れさせるのよつつ！」

黒髪 of 女医は、乱れ狂うセーエキまみれの女幹部に激しく腰を打ち付けられ、悦び of 表情に染まっていた。相手を甦る S の感覚と、貫き汚される M の感覚に翻弄され、童貞 of ペニスを徹底的に絞り上げる。

「おほおおおおおっ！ 腰イイツッ！ 締めつけられるっ！ 気持ちいいっ！ 気持ちいいっ！ もう腰が止まらなひいいいっ！」

ドピユオオオオツツツ！ プシヤアアアツツツ！ ドチユウウツツツ！
限界に達した肉棒からとめない精液の津波が押し寄せた。

一瞬にして理性はもつていかれ、ただ爆発的な快楽を発する肉ペニスの感覚だけが生々しく感じられる。

「出へるうううっ！ おおおっ！ セーエキいいいっ！ あおおっ、たまりまくった濃いザーメンが爆発してうううっ！ イクイクウウウツツツ！ シスカーレット、チンポで……マ○コに絞られて中出ししてうううっ！」

拘束されて、跨がられての強制射精は、堪らないほどに女幹部の性癖を刺激した。

首筋がゾクゾクとあわ立ち、自由にならない両手・両脚の拘束感が堪らない。跨がる白衣の女を、部下を苛める自分自身に置き換え、そして、弄られる自分の快楽と重ね合わせる。能動的で受動的。

戦士としての誇りも使命も投げ捨てたとき、そこには抗い得ない甘美感の花園が広がっ

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>